軽種馬生産技術総合研修センター マンスリーレポート7

軽種馬生産技術総合研修センター
Center for Equine Breeding Technology

米国ケンタッキー見聞記・パートⅠ

2009年11月14日，成田空港から米国に向けて旅立った。軽種馬生産地の護蹄に役立てるため，世界有数の軽種馬生産地であるケンタッキー州レキシントンを訪ね，そこでの種牡馬や子馬の肢蹄管理の実態を視察した。数回に分けて，ここにその概要を紹介する。

種牡馬編

管理状況

現地到着の翌日，４ヵ所の種牡場を訪ね，種牡馬の肢蹄管理状況を視察した。４場いずれも，通常４週間毎に装削蹄を実施していた。ただし，牧場Ａの種牡馬の１頭は，右後肢に鉄尾の長い，ややカカトを高くした特殊蹄鉄(踵台式連尾蹄鉄)を装着し，６週間～２ヵ月の間隔で装蹄していた。

鉄尾の長い踵台式連尾蹄鉄

放牧時間は肢蹄に問題のない馬は長時間放牧が良いと考えて，14時～朝７時までの放牧を実施している種馬場もあれば，一年中６時30分～12時まで放牧する種馬場，７時30分～10時30分の３時間放牧を実施する種馬場など，種馬場によってまちまちであった。

運動の内容を聞いてみた。なかには放牧以外は特に運動させない種馬場もあったが，放牧後，高齢馬や肢蹄に問題がある馬以外は，適度なウォーキングマシン運動を実施している種馬場，週６日の乗り運動を1600～2000m実施している種馬場もあった。

マネージャーたちのコメント

Ｓ氏：出来れば蹄鉄は履かせたくないが，見学者に跛行は見せられない。状態が良くなれば蹄鉄は外す。競走馬上がりの新種牡馬も跣蹄(はだし)にした当初は痛がるが我慢させる。自然体が良いと思う。また，強い外向の種牡馬には，内向の繁殖牝馬を付けるなどの配慮が必要である。

Ｈ氏：放牧時間が長い方が馬の気分が良い。どうしたら馬がハッピーになるかを考えている。

Ｂ氏：蹄壁欠損や裂蹄などを防ぐために全馬の前肢に装蹄を行っている。蹄形を良好に保つためには装蹄が必要である。

所感

肢蹄に問題があり運動ができない種牡馬は，総じて脂肪が付き過ぎており，BCSスコアーが７に達する馬もいた。肢蹄への負担が懸念された。

一般に放牧時間が長いと採食量が多くなり，太りやすいが，乗り運動を実施していた種馬場では，無駄な脂肪は付いておらず筋肉質の引き締まった馬体で，状態は良好であった。しかし，そこでも肢元に不安のある種牡馬のBCSは高く，ブヨブヨと肥満した馬体の馬もいた。やはり適度な運動が不可欠であると感じたが，そのためにも肢蹄の適切な管理は不可欠であろう。装蹄については，必要に応じて様々な特殊蹄鉄を活用し，蹄の変形予防やトラブル悪化の防止策に努力していた。興味を引いたのは，凹湾蹄にキャップト蹄鉄を装着して，蹄負面が広がり過ぎないように抑えていたことであった。装着されたキャップト蹄鉄を見たのは初めてであるが，中国の纏足のようにも見えるものの，鉄尾部に被覆式部分はなく蹄機作用を阻害しないための配慮と思われた。

蹄壁の凹湾を抑制するキャップト蹄鉄